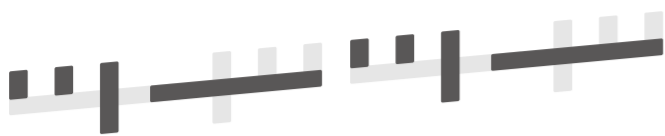


佐藤史治 + 原口寛子
2020.11.28 SAT — 12.22 TUE
10:00 — 18:00
WEDNESDAY CLOSED

2020年度 金沢アートグミ企画公募展

佐藤史治＋原口寛子



2011年の結成以来、佐藤史治＋原口寛子は〈2人〉というユニットの単位に着目し、遊びをはじめとしたコミュニケーションを生成するルールを編み出しながら、主に映像インスタレーションによる作品を発表してきました。

個展のタイトル《ツーツー》は、電話の着中音であり、〈Two〉という意味も込められています。また、以心伝心を意味する〈つうつう〉というニュアンスもそこに聞き取ることができるでしょう。本展では、建築家・村野藤吾氏（1891－1984）が設計した北國銀行の空間を活かして発表します。折しも対面でのコミュニケーションがリスクとなった本年、ビデオレターや葉書、そして身体接触を想起させる2人の作品をご覧ください。



1 指の腹（2020年／HDビデオ／1分34秒）

人と人の接触を板画のように捉えた作品。アクリル板越しに2人の身体を（非）接触することで、接触面の皮膚がプリントされたように貼り付いていく。肉片のような本作のイメージは、今から100年前に「スペイン風邪」が流行した時期に生まれたタダやシュルレアリスムでも見られる、断片的な手や肉片のイメージとも重なるかもしれない。（佐藤）



飛沫や指紋といった、人が「そこにいた」痕跡は拭き取ることが推奨されている昨今ではあるが、本作では指の腹のイメージを、コピー＆ペーストするようにアクリル板＝スクリーン貼り付けている。指先から削がれた映像が示すのは、一方から一方への接触の失敗であるとともに、身体の痕跡がデジタルなイメージのように扱われる様子である。（原口）



2 シェヘラザードのビデオ・レター（2018年〜／3チャンネルビデオインスタレーション／HDビデオ／52分56秒）

寝る前にスマートフォンを見るのが習慣化している。そのスマートフォンに、眠る前に物語を吹き込み、相手に送信して複数の物語をつつていく作品。物語は、その日の私的な出来事やニュースが自ずと反映されている。谷川俊太郎＋寺山修司『ビデオ・レター』を下敷きに、『千夜一夜物語』のストーリーテラー、シェヘラザードのことを考えた。（佐藤）

「お伽噺」とは、退屈な時に話し相手になることを意味する「伽」を含む言葉であり、時代を超えて、不特定多数の作者によって紡がれた物語だ。本作では、ビデオ・メッセージとして物語を送り合い、2人で1つの物語を作り続けている。その日あった出来事を元にした話が、スマートフォンやメッセージ・アプリを通して、自分の手を離れた「お伽噺」となっていく。（原口）

Fumiharu Sato + Hiroko Haraguchi - Busy Tone



3 Stamps（2020年／ハガキ、HDビデオ）

メッセージ・アプリの「スタンプ」と切手を意味する「スタンプ」。本作では切手だけ貼り付けた手紙をお互いに郵送しあっている。相手が送った切手の図柄からメッセージを想像・解釈して、それに対して自分のメッセージを伝える、というやりとりを繰り返した。2人の手元には、ちぐはぐな会話のキャッチボールと、絵文字として使用したスタンプが残された。（佐藤）

切手の図柄を絵文字に見立て、文章を作って葉書に貼って送りあう。自分のメッセージはどれほど相手に伝わり、また相手の意図は自分はどれほど理解しているのか。少し前まで、人は葉書に言葉を綴り、今よりも気軽に文通していた。さながら、送受信に時間がかかるメールやメッセージ・アプリのように。（原口）

5 ツーツー（2020年／電話番号）

1991年開催の「電話網の中の見えないミュージアム」という企画の図録には、〈NTTの電話網全体を美術館と見立て、自分の部屋の電話やFAXでそこにアクセスするだけで、世界の最先端のクリエイターたちの作品に触れることができる〉と書かれている。2020年はオンラインイベントが急増した。本作では電話の着中音(Busy Tone)をモチーフにしている。（佐藤）

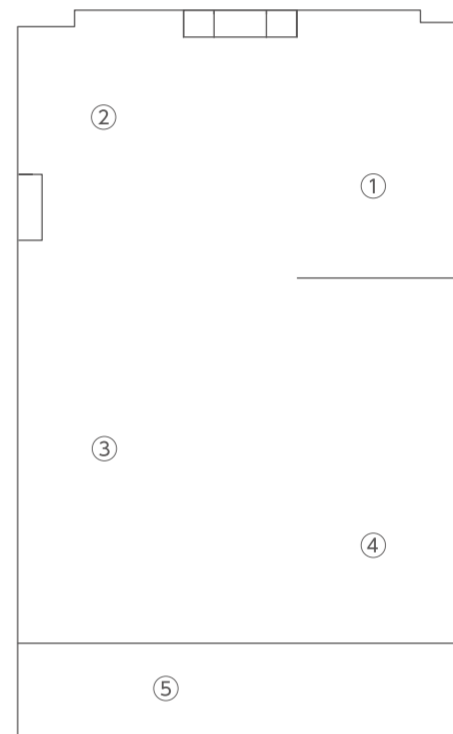
ステージにある電話番号に電話をかけてもらう参加型作品。「ツーツー」という音を佐藤・原口が交互に発音することにより、互いの声色を真似し合い、会話のようなやりとりとなる。通話ができない状態を示す着中音を模した2人の音声と、一対一のコミュニケーションツールである電話を接続した作品。（原口）



4 顔の線（2020年／HDビデオ／8分40秒）

飛沫感染防止のために、至るところで目にするアクリル板。本作では、人と人とを隔てる飛沫感染防止板の用途を転用して、それぞれのプロフィールをなぞるための支持体として使用した。アクリル板越しに座る佐藤／原口は反射する自分の顔をなぞり、手前には原口／佐藤は相手の顔をなぞる。2つの右手が不器用に描くポートレート。（佐藤）

人と人の接触やおしゃべりの飛沫を防止するアクリル板やビニールシート。透明な仕切り越しに会話をするニューノーマルにおいて、私たちはどれほど互いの顔を見ているのだろうか。相手と自分の顔をアイコンとして捉えるのではなく、その時間、その空間にいることを確認し合うためのおしゃべりのような手遊び。（原口）



Profile		
佐藤史治＋原口寛子 （さとう・ふみはる＋はらぐち・ひろこ） 2011年に結成した2人組のアーティスト・デュオ。ともに2014年に筑波大学大学院 人間総合科学研究科 芸術専攻総合造形領域修士。 対話のはじまりである「2人」の間から生じる対立やその解消、協調に関心を持ち、作品を制作している。場所に触発された遊びや、好奇心による行為の共同作業、すでにある撮影技法や編集方法のチープな転用や応用などをもとにした映像インスタレーション作品をおもに発表。 https://satoharaguchi.org/	【グループ展】 2011 「BankART Life III “新・港村”」（新港ピア、神奈川県） 2015 「Denchu Lab.」（旧平橋田中邸、東京） 2015 「アートいちほら2015秋」（旧里見小学校、千葉） 2016 「みっける日常ヨコハマ」（ハツネウィングA、神奈川県） 2016 「不在の選挙」（ドマトコ、float、東京） 2016 「第6回 公募 新鋭作家展」（川口市立アートギャラリー・アトリア、埼玉） 2016 「みっける！下町工場エリアのある日！！」（ウラダナ、東京） 2017 「いちほらアート×ミックス2017」（旧里見小学校、千葉） 2017 「影⇒光」（川口市立アートギャラリー・アトリア、埼玉） 2019 「Communication / Cut-up / Atmosphere」（あをば荘、東京） 2020 「すみだ向島 EXPO2020」（旧七軒長屋C、東京）	【ワークショップ】 2014 「親指をあつめる」(パークレジデンス善福寺、アートいちほら2015秋、玉川大学) 2017 「まちの灯りと影であそぼう」(川口市立アートギャラリー・アトリア、埼玉) 2019 「ゆびのかたて」(ファンタジア! ファンタジア! 「対話のためのプラクティス」、sheep studio、東京)
【個展】 2011 「はじめてごねる」(筑波大学アートギャラリーT+、茨城) 2011 「とくべつなくび」(墨東まち見世2011、旧S家、東京) 2012 「SHOW ROOM」(墨東まち見世2012、あをば荘、東京) 2013 「アフターエフェクト」(水戸のクワマリ荘内 SpaceAFA、茨城) 2013 「いきき」(マルタプランチ、徳島県佐那河内村) 2017 「親指をあつめる_20170531」(Tamagawa Art Gallery Projects、玉川大学、東京) 2018-2019 「たそかれ」(水戸のクワマリ荘内 SpaceAFA、茨城) 2019 「talks」(現代美術製作所、京都)	【パフォーマンス】 2012 「昨日の今日」(墨東まち見世2012、東京) 2014 「さいごにごねる」(Studio WAGAHAI クロージングイベント、東京) 2015 「佐藤勇＋原口礼子 自作をふりかえる」(みっけた日常ガチンコ発表会I、神奈川県) 2016 「博物館ミュージアム：ギャラリートーク」(みっけた！ある日の発表会、東京) 2017 「時間の計測」(アップデートプラネタリウム、ユートリア、東京)	【公募】 2015 「Denchu Lab.」採択(旧平橋田中邸 / 選考委員：白石正美、熊倉純子、椎原晶子 主催：谷中のおかって) 2016 「第6回公募 新鋭作家展」優秀者(主催：川口市立アートギャラリー・アトリア 選考委員：帆足亜紀、前山裕司、村田真) 2020 「アーツカウンシル東京 令和2(2020)年度 第1期『東京芸術文化創造発信助成』」採択 2020 「金沢アートグミ 企画公募2020」採択(主催：認定NPO法人金沢アートグミ)
		【その他】 2017 アップデート・アーキテツツ(東京) 2018 佐藤原口プレゼンツ vol.2「タノタイガのマイル塾」(東京) 2018 #シネマコンプレックス文花(ドマトコ、あをば荘、墨田区立文花中学校、東京) 2020 兵庫県立石高等学校「美術概論」のレクチャー(兵庫)

Information		
2020.11.28 SAT — 12.22 TUE 10:00 — 18:00 WEDNESDAY CLOSED / ADMISSION FREE	配信トークイベント 金沢／墨田のオルタナティブ・ツーツー	アクセス＆お問い合わせ 金沢アートグミ 石川県金沢市青草町88 北國銀行武蔵ヶ辻支店3階 金沢駅より徒歩13分 / 北鉄バス「武蔵ヶ辻」下車すぐ 電話 076-225-7780 メール info@artgummi.com HP https://gallery.artgummi.com/
金沢アートグミ 主催 認定NPO法人金沢アートグミ 協力 金沢アートグミにご寄付頂いた皆さま、キタイッサカ、あをば荘 この企画は認定NPO法人金沢アートグミの第5回企画公募で採択されました	佐藤と原口が拠点を置く墨田区・向島エリア。本イベントでは、墨田区のアートスペース「あをば荘」の安藤達朗氏と、金沢にある「キタイッサカ」の上田陽子氏をゲストに招き、それぞれの地域にあるオルタナティブ・スペースを佐藤原口の板書とともに紹介します。	編集・執筆 佐藤史治＋原口寛子 アートディレクション 倉有希 (daichusho design) デザイン補佐 佐藤史治＋原口寛子 発行 認定NPO法人金沢アートグミ
本展のインスタレーション・ビューおよび記録映像は、2021年1月22日より下記のウェブサイトより順次ご覧いただけます。 https://satoharaguchi.org/portfolio/busytone/	日時 12月6日(日) 14:00 - 15:00 会場 オンライン 視聴無料 ゲスト 上田陽子 (キタイッサカ)、安藤達朗 (あをば荘) * 配信 URL はホームページでご確認ください	

